

古文化

受け継がれる、日本屋根の伝統美。

第127号



宇佐神宮 本殿
[大分県宇佐市南宇佐]



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

八幡総本宮 宇佐神宮

[大分県宇佐市南宇佐]

御祭神と御本殿(国宝)

勅使門を中心に廻廊が巡り、その奥に御本殿(表紙写真)があり、正面向かって左より順に一之御殿、二之御殿、三之御殿と並びます。一之御殿から順に、八幡大神、比売大神、神功皇后をお祀りしています。一之御殿は神亀2年(725)、二之御殿は天平5年(733)、三之御殿は弘仁14年(823)に造営されました。現在の本殿は、安政2年(1855)から文久元年(1861)にかけて造営されたもので、昭和27年(1952)に八幡造本殿の原型として国宝に指定されました。

建築様式は八幡造と呼ばれ、2棟の切妻造平入の内院(後殿)と外院(前殿)が造り合いで結構され、両殿の間に一間の相の間(馬道)がつき、その上の両軒に接するところに大きな金の雨樋「宇佐の黄金樋」が渡されています。三殿とも屋根は檜皮葺の反り屋根、白壁朱漆塗柱の華麗な姿で横一列に並び、八幡総本宮に相応しい威容を示されています。平成24年から27年にかけて、平成の大造営が行われました。

由緒

宇佐神宮は全国八幡社の総本宮です。

八幡大神とは、応神天皇の御神霊で欽明天皇の32年(571)に初めてこの宇佐の地に御示現になり「われは菅田天皇八幡八幡麻呂なり。我名をば護国靈驗威力神通大自在王菩薩と申す」と告げられました。

応神天皇は英明にして、大陸の文化や産業を輸入して新しい国づくりを進められ、八幡大神は神徳も高く、皇室では伊勢につぐ御先祖の神社として崇敬され、特に勅使の和気清麻呂に国体を正す神教を授けたことで有名です。

もとより、この宇佐は神代に比売大神が天降られて早くから開けた処で、宇佐の国造はこの神を奉祀してきました。また神武天皇御東征の皇軍を迎えた聖地でもありました(一柱騰宮)。

比売大神は、後に筑前の宗像大社や安芸の厳島神社に祀られ、福德愛敬、交通安全等の守護神として崇められ、また神功皇后は母神として宇佐に祀られ、神人交歓、安産、教育等の神徳も高くあらわれました。



入母屋造檜皮葺の楼門「勅使門」

この三殿一徳の八幡宮の御神威は皇室だけでなく一般の人々にも鎮守の神として信仰されました。

そもそも八幡信仰は、応神天皇の聖徳を称えただけでなく、日本固有の神道と外来の仏教に海外の文化や信仰が融合したもので、神事、祭会や建造物、宝物にそのうわしい姿を遺しています。

呉橋(県指定有形文化財)

昭和初期までは表参道であり、朝廷より派遣された勅使が通ったため、勅使街道とも呼ばれる西参道に位置する「呉橋」。宇佐神宮の西を流れる寄藻川に架かり、唐破風造りで曲線が美しい檜皮葺屋根に覆われた木造橋です。鎌倉時代以前よりあり、中国の呉の人が架けたと伝えられ、名前の由来となっています。



屋根が付いた朱塗りの優美な橋「呉橋」



宇佐神宮 境内図

主任文化財屋根葺士 検定会 実施される

檜皮・柿葺【第20回】● 令和3年10月25日(月)～10月30日(土) / 1名(檜皮葺師)

本年度は受験者1名となり、檜皮葺での受験となりました。苦勞して作製していたように思いますが、全体的な屋根葺としては及第点となりました。しかしながら、座学に関しては大きく減点項目があり、責任者としては間違っほしくない箇所での減点を重ねたため、残念ながら不合格とさせていただきました。外部検定員の間からも、実技の部分では不合格をつけた方はおらず、内部検定員及び採点の結果と同じ結果でした。次年度、座学

[会場●山南ふるさと文化財の森センター]
部分については受験し直してほしいとしました。

これからの職人、責任者には、説明する能力や積算する能力は不可欠となっていくものと思われます。そのため、図示や算定基礎はしっかりと身に付けていってほしいと思います。今後も、当会としては、このような検定会を通じて技術者の資質向上に努めてまいります。

最後になりましたが、ご協力いただきました皆様に紙面を借りて御礼申し上げます。



檜皮実技



査定の様子

主任文化財屋根葺士 認定証 更新講習会 開催

今年度も、京都女子大学より鶴岡典慶教授を講師にお迎えし、檜皮葺19名の更新講習会を行いました。例年続けてきている更新講習会ですが、本年度についても大規模感染症の影響が収まらず、疾病を原因として講習会に参加できない人員が出ることとなりました。その大変な社会状況の中でも京都研修センターまで足を運んでいただき、更新講習に参加してくれた皆様には感謝を申し上げます。

講習参加者が講義に耳を傾け、特に効率といった点について関心を持って聞いていたように思います。日当の単価とコストという点については主任技術者がどのように感じ取っていたのか興味深く思います。日頃コストというところは経営者に任せて、現場の責任者が考える

[会場●京都市文化財建造物保存技術研修センター]

ことはあまりないように思われますが、自分たちが行っている工事がどのような原価管理をしているのかということ、少しでも気に留めていただくことができたのではないのでしょうか。保存会としても上記を含め、主任技術者のさらなる意識向上のため、講習会を通じて新しい知見を身に付けられるように努力していきたいと思えます。

ただ、担当理事としては日当単価と実際の賃金にはかなりの乖離があるのは各保存会会員各社当然の理屈であることを、もっと発注者側には理解していただかないと、お互いに齟齬が生まれたままであるように感じられました。このあたりは今後の課題として説明できるように心掛けたいと思えます。

令和3年度 檜皮採取者(原皮師)中級研修 終わる

令和3年度の檜皮採取中級研修は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、当初の予定を変更し『新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン』『新型コロナウイルス感染予防実施マニュアル』に基づき、10月12日より開始しました。

本年度は、三上山国有林、増位山国有林、賤母国有林、吉川八幡宮、大又国有林、妙法山国有林、高塚古墳、城山国有林にて研修を行いました。1クール2週間で入山し、限られた時間の中での作業になります。

研修に参加した中級研修生19名は、2～3クールお互いを高め合いながら技術の向上に取り組み、2月4日に全日程を終了しました。

コロナ禍の先を見通しづらい状況ではありますが、技術の継承、研鑽に励み、研修を進めてまいります。

日程変更など迅速に対応くださった国有林管理署の皆様、吉川八幡宮の皆様、採取事業に関わるすべての皆様に感謝申し上げます。今後ともご理解とご協力をお願いいたします。



バランスをとりながらヘラ入れ



1丸単位に再結束された丸皮



檜皮結束の切断

令和3年度 檜皮採取技術査定会

期 日 ● 令和3年10月26日(火)・27日(水)
会 場 ● 吉川八幡宮
(岡山県加賀郡吉備中央町吉川3932)

檜皮採取技術査定会は、檜皮採取研修生の日頃の研修成果を査定するとともに、技術の継承と向上を目的として毎年行っております。昨年は、新型コロナウイルス感染拡大、緊急事態宣言発出のため中止しております。

当日は、吉川八幡宮宮司様をはじめ、保存会会長、保存会理事、派遣事業所会員が参加し、総勢13名で行い

ました。査定を受ける研修生は5名で、査定員は指導員2名と指導補助員1名の合計3名で行いました。研修生は日頃の成果を存分に発揮し、採取作業にあたりました。1日目の午後から作業に入り、2日目の正午には査定会は終了しました。査定員の採点を元に、日頃の研修の年間実績考課値を加味して担当役員が技術ランクを決定、後日派遣事業所に通知いたします。今後も採取研修に真摯に取り組んでくれることを期待します。

最後に、今回査定会の開催にご協力いただきました吉川八幡宮の皆様にご心より感謝申し上げます。



ヘラを使って慎重に作業する研修生



技術を見極める査定員



檜皮の結束や切断をする研修生

令和3年度 茅葺中級研修

今年度の茅葺中級研修では、10月4日より京都市指定の文化財 奥溪家住宅 長屋門の葺き替え、11月15日より滋賀県草津市 NPO 法人宅老所「心」の母屋ヨシ葺きの葺き替え、1月25日より静岡県伊東市大室山での茅刈りを行いました。

研修では当保存会 長野直人準会員・山田雅史正会員・熊谷秋雄正会員がそれぞれ指導にあたりました。研修生は京都をはじめ、大阪、宮城からの参加となりました。京都の研修生に対して関西の屋根の研修という趣になりましたが、京都と滋賀近郊であっても地方性があり、違

いの多いことには驚きがあり、茅葺の多様性を再確認できたことと思います。

大室山での茅刈りは2年振りの実施となり、地域の方々との連携を深められ、今後さらに継続していける活動として進めていけることと思います。茅の質も良く、良質な茅束を採取することができました。

本年度も昨年同様、コロナ禍での活動となり様々な配慮が必要でしたが、葺き替え研修2回、茅刈り研修1回をそれぞれ行うことができましたこと、各関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。



熱心に取り組む研修生たち



新たな茅を葺き上げる

奥溪家住宅 長屋門 茅葺



完成した奥溪家住宅 長屋門



入母屋屋根 妻の刈り込み



表面を揃える刈り込み

NPO 法人宅老所「心」
ヨシ葺



完成した NPO 法人宅老所「心」

大室山
茅刈り



刈り取られた茅を前に



茅を抱え鎌で切る



ある程度の量になったら紐で束ねる

令和3年度 茅葺中級研修 指導員からの感想

指導員としての喜びを 感じながら

指導員 長野 直人

この度、京都市にある奥溪家住宅の研修に指導員として参加させていただきました。

研修をさせていただいた長屋門は、住宅密集地の中にあるにも関わらず、現在に至るまで時代に流されることなくそこにあり続けたことに感動し、所有者である奥溪様に敬服いたしました。そして、そのような建物に関わらせていただくことに喜びと同時に、指導員として研修を遂行する責任の重さも感じました。

屋根は垂木の取り換え、そして野地補修から始まり、全面葺き替えでは無かったので新規の隅部・平部と合わせて既存部分との取り合いがあり、また新規の棟を傾いた既存の棟に合わせて作らなければいけないなど、内容がとても多岐にわたりました。広くない工事範囲でしたので、研修生にはそれぞれ違う部位を交代で担当してもらいましたが、その度にそこに合わせた材料や納め方を技量に合わせて指導することは、中々骨の折れる作業でした。

指導は大変なことが多かったのですが、研修生は皆とても真面目に、そして熱心に取り組んでくれました。疑問に思ったことは積極的に聞いてきたり、研修生同士で相談したり、また休憩中はそれぞれの事業所での経験談を話したりと、とても雰囲気良く、指導にも熱が入る研修でした。

この研修で嬉しかったことは、研修生の一生懸命さに所有者である奥溪様も感心してくださり、出来上がった屋根に喜んでくださったことです。奥溪様は合間に奥溪家や建物の歴史、維持保存の大変さ、自身の仕事について等、様々なお話をしてくださり、研修生はもちろん、私もとても勉強になりました。この研修では研修生、指導員、所有者がとても良好に、そして濃密に関わりあいながら研修を行えたことがとても良かったと感じております。

最後になりますがこのような出会いや機会を与えてくださった保存会にとっても感謝いたしております。ありがとうございました。

地域の葺き方を習得し、 自分の財産に

指導員 山田 雅史

今年度、草津市での葺き替え、大室山での茅刈りの指導を担当させていただきました。

草津では、入母屋型ヨシ葺で、滋賀県においては一般的な形式の屋根の葺き替えの研修となりました。滋賀県全域がヨシ葺の地域という訳ではなく、山間部では山茅であるススキ、平野部ではヨシが用いられます。私自身、修行時代は滋賀に多く呼んでいただき、そこで得た技術を後進に伝えることができ、嬉しく思います。

滋賀のヨシ葺で特徴的なのは、まず「作り茅」です。役物のみならず平葺まで全てを「作り茅」で行います。これは伊勢神宮にも共通する葺き方です。一般的に「勘」を必要とする、積層に敷き並べる葺き方に比べ、加減の情報が得られやすいこの葺き方を自分の葺き方の一つとして加えられたのなら、研修生にとっては技術という財産を増やせたのではないのでしょうか。

大室山の茅刈りにつきましては、山焼きを含め山頂リフト等観光施設として知られる場所での茅刈りであり、遊びに訪れる方々からの視線もあり、茅葺きを知っていただく良い機会であると実感しました。通りがかりの年配の方々が、「昔はこの辺にも茅葺があったよ」と懐かしそうに語る様子は、嬉しそうであったように思います。

刈り場は山裾の扇状になった場所で、さほど広くはないのですが、細く素性の良い茅が密に生えており、良い茅束が作れます。今後も山の観光と共に茅葺の認知、茅刈りの重要性を発信する場として大室山の茅刈りの存続ができますことを願っています。

研修生からの感想

引き継いでいきたい 大室山の茅刈り

指導員 熊谷 秋雄

今回、初めて全国社寺等屋根工事技術保存会主催の大室山での茅刈り研修に参加させていただきました。

大室山は静岡県伊東市にある標高580mの火山であり、富士箱根伊豆国立公園内にあります。毎年2月第2日曜日に山焼きが行われています。昔は大室山で採れた茅は、屋根を葺いたり牛馬のエサなどに利用されてきましたが、現在は、山の保全を目的として始めた行事が今では伊東の春の風物詩として定着し、大事な観光資源になっています。毎年火入れをすることによって、山の麓に良質なススキが茂っています。ここの刈り場と大室山を管理する「池総有財産管理会」様から無償でお借りして、2年前から茅刈り研修を実施していると聞いています。

研修生の方々は、熱心に茅刈りに励んでいました。私たちが、普段から地元宮城で使用している大型の茅刈り鎌を研修生に貸し出したところ、研修生にとっては使い慣れない道具でしたが、地方によって異なる道具の特性を理解し、徐々に手際よく刈ってくれたように思います。研修生の方々はご苦労様でした。

山焼きと茅刈りのサイクルの中、大室山に人の手が加わり続けることで、その独特な自然景観が保たれていくことは、日本の里山文化にも通じるとても大切な生業だと思います。その一端を体感できるこの研修は、とても貴重な機会でした。来年も大室山での茅刈り研修を継続していきたいと思います。伊東のシンボリック存在で、多くの人を惹きつける大室山だからこそ、今回の研修の意義や良さを、自分たちだけで噛み締めるのではなく、より多くの人に知ってもらえる発信の場になってほしいと感じました。

学ぶべきものが多かった 有意義な研修

研修生 金沢 翔太

茅葺研修は、滋賀県草津市のNPO法人宅老所「心」での全面葺き替え。期間は令和3年11月15日から12月19日までで、講師は山城茅葺の山田さん、受講生は山城茅葺の小野さん、美山茅葺の茂原さん。熊谷産業での業務の関係上、茅葺全面葺き替えの現場に解体から仕上げまでいたことはなかったので、今回は改めて全ての工程を通して行うことができ、大変勉強になりました。

屋根材はヨシ。熊谷産業ではヨシを扱うことが多く、ある程度慣れたつもりでいましたが、初めて琵琶湖のヨシを扱う機会となり、北上川のヨシとの違いに戸惑うこともありました。現場ではなかなか聞くことのできない作業上の意味や道具の扱いについても学べる機会となりました。

また、隅、葺甲といった役物に取り組めたことを今後に生かしていきたいと思います。材料の違いについてもそうですが、仕上げ、特に棟の納まりの違いが東北や関東とは違い、これも勉強になりました。風土や気候条件もあるのでしょうか、その土地土地での職人氣質もあるのだらうと思うと、興味深いものでした。

茅葺についての技術はもちろん、他の会社の方と交流でき、大変有意義な研修となりました。このような研修に参加する機会を作っていただいたことに感謝しています。ありがとうございました。

研修生からの感想

伝統を守り伝える 担い手でありたい

研修生 小野 晃穂

技術研修では、屋根の解体、下地の補強、軒付け、平葺き、棟積み、刈り込み等の必要な技術や工程を学び、茅刈研修では、屋根に必要な茅場で茅刈りを学びました。また、実際に現場で携わる中で、地域ごとに違った茅葺の文化や特性を学ぶことができ、大変貴重な経験となりました。

まず、京都の奥溪家住宅では、長屋門の屋根に茅が材料として利用されていました。滋賀の宅老所では、琵琶湖の湖畔でヨシ刈りが盛んなこともあり、ヨシが屋根の材料として使用されていました。大室山は昔から山全域が茅場となって地域の貴重な生活資源だったことなど、地域の方にお聞きして知ることができました。古くより、それぞれの土地にある茅でその土地に合った方法で茅葺屋根は作られており、今後の将来もこの日本の歴史を継承していく重要性を再確認し、日本の伝統を守り、伝承していく一員でありたいと強く実感しました。

また、今回の研修で、他の事業者とも交流を持つことができ、とても刺激になりました。今後も仲間と交流を続け、切磋琢磨し、自身のモチベーションの一つにしていきたいと思います。研修で得た技術や知識を事業所に持ち帰り、自身のスキルに磨きを掛け、日々精進し茅葺きを通じて社会貢献していきたい所存です。

研修会において丁寧にご指導いただいた講師の方々をはじめ、関係各位に心より感謝しております。このような機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

仕上げまでの作業が経験でき、 自信に

研修生 茂原 教蔵

屋根葺研修では、解体から刈り込み、仕上げの一連の作業を通して経験できたことで、これまで断片的にやってきた作業のつながりへの理解が深まりました。また、一つの家屋を自分の手で完成させたということが自信になりました。

疑問に感じた点をすぐに尋ね、それに対する指導時間がしっかり確保されている研修という場は、修行している身としてはとても貴重な時間でありました。人材育成の点から見ても、作業を終始理解した上で現場に臨むので、効率良く技術を身に付けていくことができ、必要不可欠であると思いました。また、茅刈り研修では、茅を刈ってくださる方々の苦勞を身をもって感じることができました。

もちろん真っ直ぐな茅が屋根を葺く上では使いやすいたのですが、質の良い茅だけを刈るのはとても手間が要り、数量も限られます。多少曲がった茅でも上手く葺く技術を身に付けなければならないと感じました。茅を扱う身として、茅刈りは必須であり、広くには茅場の維持、環境の保全にも関わることができる素晴らしい役割を担っているのだと思います。

この度は、貴重な研修を開催していただきありがとうございます。

丁寧で分かりやすい 指導に感謝

研修生 富田 啓介

この度、研修に参加させていただき、ありがとうございました。茅葺の工程は多くの細かい作業を繰り返して少しずつ棟側に上がっていきますが、作業の一つひとつに理屈があり、身体が自然と動き、また、相手に説明ができるようになるまで噛み砕かなければ一つの作業を理解したことにはならないなと思いました。材料には個体差があり、同じことをするにも時間が掛かったり失敗してしまったりと、茅葺の難しさ、奥深さと共に面白さも感じる事ができました。

指導員の長野さんの説明は丁寧で分かりやすく、また、話も面白くてとても勉強になりました。長野さんに感謝いたします。

研修生2名とは今回初めてお会いしましたが、相手の作業の進み具合により材料や道具の段取りをしなければなりません。使いやすいように相手と呼吸を合わせて進めていくといった意味では、コミュニケーション能力の点でも勉強になりました。

この研修で教えていただいたことは、直ぐに習得できることではなく、繰り返し作業することで自分のものになると思います。これをステップに活躍できるよう努力する次第です。

茅に対する思いに 変化が

研修生 余宮 祥平

今回の茅刈り研修を終えて、普段何気なく使っていた茅の有り難みに改めて気付かされました。1日約8時間山に入って茅を刈り、収穫できる茅の量は30～40束程度。一つの現場に使う茅の量から比べると到底足りなく、一体どれほどの人が何日かけて用意してくれた茅なのか…。今までも大切に使っているつもりではいましたが、この研修を終えて自分が実際に体験し、その苦勞を体感したことによって、より一層茅の一本も無下にすることはできないなと思いました。一流の茅葺き職人になるためには技術もさることながら、茅に対するそういったような思いも必要なのではないかと思いました。これからもこの茅刈り研修を続けて広がってほしいなと思いました。



大室山 指導員と研修生

令和3年度 文化財研修会

日 時 ● 令和3年12月3日(金) 13:00~16:00
会 場 ● 延暦寺 国宝 根本中堂 大改修工事現場、
延暦寺会館
(滋賀県大津市坂本本町4220)



延暦寺 根本中堂 募股彫刻

日本でも名高い比叡山延暦寺 国宝「根本中堂」の大改修工事現場を見学させていただき、研修会を行いました。正・準会員を対象にしており、コロナ禍で移動しにくい中、約60名の参加がありました。生涯において一度見られるか見られないかの貴重な現場と認識しています。本当に感無量でありました。

はじめに、延暦寺副執行 総務部長 小嶋 覚俊様より「延暦寺について」のお話をいただきました。「これだけの施設を守り続けていくのは、並大抵のことではございません」との言葉がとても印象的でした。加えて、「70人の僧、200名の職員で運営」と聞いただけで、いかにここが日本の代表であるかがわかります。伝統=電灯であり、明かりをとすこと。「一隅を照らす」たくさんの明かりが集まって、100、200年と繋がれてきたことがわかります。今自分たちが何をなすべきか。冒頭から、心に刺さる、大変意味深い考えさせられるお話でした。

次に、根本中堂の修理の概要を滋賀県文化スポーツ部 文化財保護課 課長補佐 菅原 和之様よりご説明いただきました。

また、文化財講義として、岡山理科大学 建築歴史文化研究センター長・特任教授 江面 嗣人様より「文化財保護における創造的活用~文化財保護法の目的について考える~」と題してお話していただきました。「文化財保護法とは、国民の文化的向上に資する…」と、つまり価値ある人間をどう作っていくか?…深すぎて、この問題は一生涯の課題だと感じました。「新劇」と「能」を例えに、「新劇は直前まで練習しているが、能は練習しない。古い伝統は一人の人間ではとうてい到達できない、極められない。だからこそ日々が学びである」と。多くの参加者の心に響いたことと思います。

その後、2班に分かれ、修理工事の現場を文化財保護課の担当職員の方の説明を受けながら回りました。

半日の限られた時間でしたが、考えることは無数にあり、本当に有意義な時間となりました。単なる建物の維持管理だけではなく、伝統、歴史を引き継ぐ為には、われわれ技術者だけでなく、多くの人々に支えられながら今があるのだと、ひしひしと感じました。今後ますます精進してまいります。

研修会 「延暦寺会館 比叡」

開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 大野 浩二

講 話 ● 延暦寺 副執行 総務部長 小嶋 覚俊 様
題目「延暦寺について」

概要説明 ● 滋賀県文化スポーツ部 文化財保護課 課長補佐 菅原 和之 様
「国宝 根本中堂 修理概要」

文化財講義 ● 岡山理科大学 建築歴史文化研究センター長・特任教授 江面嗣人 江面 嗣人 様
題目「文化財保護における創造的活用 ~文化財保護法の目的について考える~」

閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 執行理事 友井 辰哉

見学会 「延暦寺 国宝 根本中堂 大改修工事現場」



廻廊の屋根

今年もこのような研修会を行うことができ、現場を提供いただいた延暦寺様、滋賀県文化スポーツ課、元請け各業者の皆様、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



興味深く眺める参加者



屋根の高さから見学する参加者



延暦寺 副執行
総務部長 小鴨 寛俊様



滋賀県文化スポーツ部
文化財保護課
課長補佐 菅原 和之様



岡山理科大学
建築歴史文化研究センター長
特担教授 江面 嗣人様



工事現場前に集合

令和3年度 ふるさと文化財の森システム推進事業 「森が支える日本の技術 2021 公開セミナー」開催

まだまだコロナ禍で大変な世の中ではございますが、昨年に引き続き、事業を行っていく方針となりました。そして、感染対策にも十分な対策を取り、見学会、講演会を執り行いました。

例年同様、清水寺境内においては、屋根葺・板割の実演見学、ビデオの上演などの催しを行いました。また、京都市文化財建造物保存技術センター内では、日塔和彦様を招いて、今までにはない、「世界の茅葺」についての講演となりました。1日間に短縮いたしました。中身の濃い内容で、来ていただいた方に、檜皮葺、柿葺、茅葺のことを少しでも感じていただけたのではないかと思います。

翌日、場所を滋賀県坂本の日吉大社に移し、檜皮採取の実演見学会を行いました。昨年と同じ場所で参拝者の通り道からはよく見え、多くの方よりお褒めの言葉をいただきました。私たちがますます頑張らねばならない…と感じた時間でした。

ススキは毎年生え、檜の皮は約10年で再生いたします。屋根としての寿命を終えれば自然に還り、未来に全くつけを残さない。石油が主の今の時代に何が大切なのか？…多くのことを語りかけられている気がします。どんな時代になっても自然の営みは止まりません。材料に関連し、環境についても知っていただけたと思います。

参加者から、「よくわかりました、ありがとう」と言っていただけたときが、セミナーをやって良かったと感じられる瞬間でした。現場で黙々と技を引き継ぎ、仕事をすることは一番大切なことです。しかしながら今の時代、私たちの行いとともに関心を発信することが、今後ますます必要なことではないかと思っています。この機会に私たちの技を身近で感じてもらい、技術だけでなく、技術の裏に隠された思いを少しでも感じていただければ嬉しく思います。

今年もこのような機会を与えていただき、関係者の皆様にこの場をお借りして、御礼を申し上げます。

- 名 称 ● 令和3年度 ふるさと文化財の森システム推進事業「森が支える日本の技術 2021 公開セミナー」
- 主 催 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会
- 期 日 ● 令和3年11月6日(土)・7日(日)、12月8日(水)
- 会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター(京都市東山区清水2丁目205-5)
清水寺 仁王門周辺(京都市東山区清水1-294)
日吉大社(滋賀県大津市坂本5丁目1-1)
- 共 催 ● 京都市
- 後 援 ● 京都府教育委員会、京都市教育委員会、林野庁 近畿中国森林管理局 京都大阪森林管理事務所、
公益財団法人 大学コンソーシアム京都、公益財団法人 京都古文化保存協会、
公益財団法人 京都市文化観光資源保護財団



引き継がれるものづくりの技「板割り」

1、文化財を支える技術の公開

期 日 ● 令和3年11月6日(土)
会 場 ● 清水寺(仁王門周辺)
京都市文化財建造物保存技術研修センター

(1) 伝統技術の実演

「ユネスコ世界無形文化遺産登録 伝統建築工匠の技」

1. 檜皮葺
2. 板割り

(2) パネル・道具展示

(現場修理写真や道具・模型の展示)



室内に展示された檜皮葺の模型



間近で見ることのできる檜皮葺実演



京都市文化財建造物保存技術研修センター内のパネル展示



木の間を見ながらへぐ、木取りの説明に聞き入る見学者たち



清水寺に設置された展示ブース

2、文化財講座

「世界の茅葺き技術 ～ヨーロッパを中心として～」

期 日 ● 令和3年11月6日(土)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術センター
講 師 ● 日塔 和彦氏
対象者 ● 技術者及び一般



文化財審議会委員(茨城県、市川市、野田市、流山市など)
日塔和彦氏



講演風景

3、檜皮採取実演 見学会

期 日 ● 令和3年11月7日(日)
会 場 ● 日吉大社 境内林
対象者 ● 一般



檜の外周を帯状に剥きあげる原皮師



檜皮切断の様子をカメラに収める見学者

ブリ縄を巧みに使い、
檜皮を剥きあげる原皮師



檜皮の結束

4、関連・同時開催事業

資材育成に関する研修事業

期 日 ● 令和3年12月8日(水)

会 場 ● 嵐山国有林(京都市)

私たちの仕事で欠かせないものは材料です。自然からの恵み、そんなことも感じながら、よりよい材料を収穫するため、日々努力しています。植林から、下刈り、枝打ち等、色々な作業がありますが、今回、京都大阪森林管理事務所のご協力も得て、嵐山国有林にて除伐の作業を行いました。

もともと紅葉の美しい渡月橋周辺は世界からも観光客が多く訪れます。周辺の山がぼさぼさではどうしてもありません。そこで、春、秋に彩る木々を育てるため、周りの小さな雑木を選定し、山から出します。そうすることで、残された木々はのびのびと育つわけです。獣が侵入しないように柵も修理いたしました。

こうした地道な作業が人と自然が共存できる環境を作るのだと強く感じ、草木を扱うものにとって考えさせられる時間でした。また機会があれば続けたい事業です。皆様ご協力ありがとうございました。

長引くコロナ禍の中、このような機会を与えていただき、関係者の皆様に重ねて御礼申し上げます。



除伐作業前の打ち合わせ



檜皮の感触を確かめる子供たち



柵の点検・修理

「日本の技 EXPO」開催

文化財を守る自然の素材と匠の技術

期 間 ● 令和4年2月5日(土)・6日(日)
会 場 ● 東京国際フォーラム・ロビーギャラリー
(東京都千代田区丸の内3-5-1)

選定保存技術発信事業として当初、令和3年の正月明けに実施される予定だった「日本の技 EXPO」。ところが、新型コロナウイルス感染症拡大を考慮し、一旦6月5・6日に延期となりました。しかし、事態は好転せず、さらなる延期で令和4年2月5・6日の開催となりました。

開催には保存団体による実演も予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症第6波の到来により実演が不可能となり、展示と映像紹介のみとなりました。コロナ禍の状況で準備と取り止めが重なり、関係者は大変な思いをしましたが、当保存会からは檜皮材料の展示、注釈付きのパネル展示、ビデオ上映を行い、無事に皆様をお迎えすることができました。

文化財の保存技術や伝承者の養成、原材料や道具などに関する現状をより多くの方々に理解していただける大切な事業の一つでもあり、今回、17にわたる選定保存技術の実演がすべて中止となったことは、関心がある方への訴求効果という点においてはやや物足りない結果となりました。しかし、実演の機会がまた訪れれば、会場にぜひ足を運んでいただきたいと思います。



17の技を紹介するディスプレイ



間隔をとりながら映像を眺める参加者



ロビーギャラリー内の様子

「日本の技 フェア」開催 文化財を守り続けてきた匠の技

期 間 ● 令和3年11月20日(土)・21日(日)

会 場 ● ベルサール秋葉原
(東京都千代田区外神田3-12-8
住友不動産秋葉原ビル1階)

コロナウイルス感染拡大の影響で2年ぶりの開催となった「日本の技 体験フェア」は、国の選定保存技術に認定されている34団体が一堂に会し、初めて東京で行われました。感染症予防対策のため、事前予約制という形をとり、完全に開放された屋外空間での実施となりま

した。昼間はかなり人通りのある場所柄であり、通りすがりの人たちが興味をもって外周道路から閲覧していたのもあり、当日予約を含めかなりの人数がフェアに参加してくださったように思います。

当保存会からは檜皮屋根葺模型を1基搬出し、こちらを葺き上げるという形で実演・展示を行いました。例年であれば、体験型模型を用意し、フェアの参加者には釘打ち体験をしてもらうところではありますが、本年においてそれは叶いませんでした。ただ、檜皮屋根葺模型の設置が外周部分に位置していたため、覗き込む通行人の姿も見られ、賑わいを見せていました。



木工の実演



檜皮葺の実演



今年度のwebチラシ



日本の技が集結した秋葉原

京都女子大学「伝統技法演習」 課外講義を実施

日時 ● 令和3年12月1日(水)・8日(水)
13:00～14:30

会場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

本年も京都女子大学の学生を招き、合計2回、学生への講演を行いました。コロナの都合、学生を二手に分けて、一つのグループには皮切りを実際に見てもらい、感染症対策を施した上で、多人数にならないように一人ずつ釘打ち体験をしてもらいました。もう一つのグループには実際に講義を聞いてもらい、保存会の存在意義や全国にある植物性屋根に関する資料を見てもらいました。学生さんからは質問も出て、意欲的に聞こうとする学生の数がいつもより多かったように思います。

例年、学生さんに説明していることですが、京都にある寺や神社のことですら我々の知らないことが多く、下手すれば勉強している海外の方のほうがパンフレットなどでよく知っていることがあります。それでは少しもったいなく、また、自分の国の文化を説明できないのは恥ずかしいことでもあります。日本にはこれだけ多様な文化があり、良いものがあるのだということを、そして少しでも自分の言葉で説明できるようになってほしいという意味のことを説明して、講演の締めといたしました。



説明に耳を傾け、メモをとる学生



講義風景



竹釘打ちの体験



檜皮葺模型を間近に見る学生

ユネスコ無形文化遺産 伝統建築こうしゅう工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術

「登録記念式典」開催

令和3年11月19日、東京都内ベルサール秋葉原において、昨年12月に国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産となった「伝統建築工匠の技」の登録記念式典が開かれました。文化庁の田中文化科学副大臣、塩見文化庁次長、豊城文化財鑑査官等のご臨席を賜り、田中副大臣からご祝辞を頂戴した後、登録を受けた14団体の代表が認定書の写しを拝受しました(原本は文化庁が保管)。

その後、「伝統建築工匠の技」佐々木会長から謝辞があった後、全員での写真撮影が行われました。登録を受けた17分野は歴史的な木造建造物の維持に欠かせない国の「選定保存技術」であり、当会の檜皮葺・柿葺、茅葺、檜皮採取、屋根板製作における技術の保存継承の意義を確認し、誇りをもって活動を充実していく決意を新たにすることができました。

登録認定書(写し)



登録認定書(写し)を
拝受する大野会長



一堂に会して記念撮影

令和3年度 特別講座 開講(全2回)

第1回「わたしたちの食べもの 暮らしが未来をつくる」

株式会社プラスリジョン
代表取締役 福井 佑実子



日 時 ■ 令和3年12月4日(土) 14:00~16:00
会 場 ■ 文化財建造物保存技術研修センター

今回は、オーガニックな生態系で持続可能な社会への取り組みをされている福井 佑実子様をお招きしました。

【講演内容要約】

「オーガニック」と「6次産業化」

みなさんは、昨日の夕食(食材)がどこで誰がどんな思いで作られたものか、想像できますか? ほとんどの方が、考えることがないまま食事をしているのが普通だと思います。それは、食べる人、作る人、運ぶ人が分断され、見えなくなっているからです。多くの方々が、「日々の食べ物は未来永劫に食べ続けられる」と思われているでしょうが、現在の食事や暮らしが持続可能かどうかみなさんと考えてみたいと思います。

現在、我々が置かれている状況は、「人間が安全に活動できる範囲に地球の変化がとどまれば人間社会は発展できるが、その境界を越えることがあれば、自然資源に対して回復不可能な変化が訪れる」と言われています。その中でも、種の絶滅の速度と余剰に放出された窒素やリンの長期間にわたる循環は、気候にも多様な影響を及ぼす高リスク領域にあるという衝撃的なものでした。では、その主な放出源は何かというと、私達が食料生産を増やすために農地に投入した化学肥料やグローバル経済などにあるのです。世界人口は爆発的に増加していますが、やがて現在の生活様式を維持することができなくなると考えられています。

では、日本の現状はどうでしょう。現在の日本の人口は1億2600万人。徐々に減りつつあり、2053年には1億人を割ると言われ、今後、高齢化はますます加速していくことになります。それに付随するように、日本の農業の担い手不足と高齢化は深刻な問題となっています。

6次産業というのをご存知でしょうか。1次産業(農林漁業)と2次産業(製造業)、3次産業(流通・小売業)の1と2と3を掛け合わせた言葉ですが、6次産業化とは、各産業を包括的にとらえ、主に農山漁村の豊かな地域資源に付加価値を生み出していこうという取り組みです。日本の国の持続

可能性を考えたとき、農業を切り離すことはできません。もし、6次産業化で事業を成立させられるのなら、それはひとつの方策となります。そして、日本には、農業従事者の不足に加え、輸入農産物との価格競争の激化があります。ただ、輸入農産物は、流通に期間を要し、農薬や防腐剤を使用することがあります。そこで、安心安全な有機農業やオーガニック食材を望む声が上がります。

世界的に有機食品の売り上げや有機農業の取り組み面積は右肩上がりとなっています。ここに、将来についての解決の鍵があると考えられます。なぜなら、若者の中に、有機農業に興味を持つ人が増えているからです。さらに、有機農業は、真に持続可能な農業と消費を目指しているため、SDGs(持続可能な開発目標)の取り組みとも合致しています。ここでいう有機農業とは、古い農業ではなく、古い伝統に本質を見つけ大切に、新しいやり方で未来につなげることを目指している農業をいい、持続可能な社会・世界を可能にするための重要な活動と言えます。未来のための取り組みは、企業や農家に限らず、一人一人ができる小さなこと=お買い物から良いのです。未来のために・未来を思い、商品を選択し、購入することこそ未来をつくる可能性があるからです。

持続可能な社会について改めて考えさせられました。農家でなくても自分の行動を見直すことで、幸せな暮らしを維持できるかもしれないという希望を感じました。当会に対する、「植物性屋根工事は材料の採取、施工を含めてSDGsとして立派に認められる循環型な社会の維持に役立っている」というお言葉が大変印象に残りました。お忙しいなかご講演いただきまして、本当にありがとうございました。

福井 佑実子氏プロフィール

2008年/株式会社プラスリジョン 設立
2009年/ SVP 東京 協働採択
2010~11年/大阪府第4次福祉計画策定委員
2012年~/農林水産省6次産業化プランナー
2013年/ユニバーサル社会づくり賞・兵庫県知事賞
2016~17年/「デザイン都市・神戸」創造会議メンバー
2019~21年/兵庫県農林水産政策審議会委員
2021年~/IFOAM(国際有機農業運動連盟) ASIA 理事

第2回「未来につなぐ日本人のこころ 楽焼作陶を100年先も続けていくために “今できること、今やるべきこと”」



楽焼窯元 和楽
八代 川寄 基生

日時 ■ 令和4年2月19日(土) 14:00~16:00
会場 ■ 文化財建造物保存技術研修センター

楽焼の魅力情報を発信されている川寄 基生様を招いて、楽焼の現状と今後の課題についてお話していただきました。

【講演内容要約】

まずは求められていることを淡々と

川寄氏の経歴は少し異例で、前職は石川島播磨重工業で勤務。発電で一時間に50t程度の石炭を使用するような大規模火力発電所の設計をしておられました。また、海外での仕事も多く、この間に現在の価値観に影響するような体験をされました。しかし、ご自身の生家や親の仕事がなくすわけにはいかないと、実家に戻られました。

一般的に焼物は、中国から伝来した技術を用いて日常で使う器をつくることから始まります。信楽焼や丹波焼などは、穀物をためる壺や水甕などを制作することが興りでした。反面、楽焼については、16世紀後半、千利休が茶道のために注文し作られた焼き物が基になったとされています。また、楽焼の作る工程としては、1200度程度の窯で数分焼いて作る「引き出し」と呼ばれる手法で作られます。

楽焼は茶道の為の道具であるため、お茶の道具としての要求に耐える強度で良く、使われる過程で水漏れやにおいがする場合があります。「完全なものではなく、少し不完全なものを目指す」ところもまた、普通の焼き物との違いです。さらに、冬は熱が逃げにくく、季節を大事にし、お茶人の望みに合わせて作られます。まさに、お茶を点てる主人が、客人を思う「心からのおもてなし」を反映させた作りといえます。また、日本の茶道文化が世界に受け入れられており、それは海外(ベルギー、フランス、ドイツ等)にもお茶室があり、茶道を行う海外の人々の存在からも分かります。

このような流れのなか、川寄氏は10年前から料理人との交流の機会をもたれ、お料理を引き立てる器として楽焼を作成し、それが使われるようになったことをお料理がのる器や皿の写真を交えながら紹介されました。また、京都につい

て、茶道さらには華道が栄える場所であり、海外からの観光客も来られ活発な賑わいがあり、それはまさにご自身の仕事も存続する大事な交流の場でもあったと感じられているようです。以上のような過程や思いから、現在へと伝わる楽焼の存在についても考えられています。そして、これらが50年先・100年先にも残っていくためにはどうするか。また、それを残す意義について次のように述べられました。

「まずは求められていることを淡々で行う、それこそが始まりなのだ」と。また現在、若者には多種に渡る職業の選択肢があります。その中から、この仕事を選び、後世への技術の伝達や楽焼自体を残したいと思ってもらえるような行動を自身が取ることが大切なのだと。そのためには、この仕事が経済的に安定し、広く世の中に知れ渡ることこそが大切であり、それを必要とする人々と相談しながら作るというプロセスを大事にしたいと仰いました。また実際、そのプロセスを通して、より良いものになっていると実感されているようです。

今回の講義から、楽焼やそれを作る職人、それらに係わる多種多様な人々との繋がりを知ることができ、そして多くの人々と交流することで、より良い器を作り、その技術を伝達することに繋がると知ることができました。また、楽焼が目指す「人に寄り添う温かさ」を表現するということが、この先も楽焼が続いていくための道標になると同時に、私たちが生きていく上で大切にしなければならない人とかかわり方なのかもしれないと感じることもできました。

当会としても、職人が減りつつ若年層が定着しないという現状については、共通する点が多いといえます。その点でも、川寄氏の講義内容は非常に興味深く、当会のより良い未来を考えるうえで見習うべき点があるとも感じました。お忙しいなかご講演いただき、本当にありがとうございました。

川寄 基生氏プロフィール

1972年/京都市生まれ
1996年/大阪大学工学部 原子力工学科卒業
1998年/大阪大学大学院 工学研究科修了
1998年/石川島播磨重工業入社
2007年/京都市産業技術研究所 陶磁器コース修了
2008年/京都府立陶工高等技術専門学校 成形科卒業
2008年/楽焼窯元和楽にて、作陶を始める
2016年/楽焼窯元和楽八代 襲名

発行所

京都市東山区清水二丁目 205-5
文化財建造物保存技術研修センター内



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064
<http://www.shajiyane-japan.org>

古文化 第127号

令和4年3月31日発行

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

あとがき

新型コロナウイルス感染拡大や気候変動による異常気象で世界的に混沌とした情勢が続く中、ロシアのウクライナ軍事侵攻が加わり、世界中の人々が心を痛めています。ウクライナのみなさんにも春の訪れがくることを願うばかりです。

「伝承」という言葉には、継承だけでなく、それを後世に伝えるという意味があります。歴史的建造物も、受け継ぐ側に強い意志がなければ守り伝えていくことはできません。そのため、資材確保や職人の養成は欠かすことのできない大切な事業となります。今年度は事業継続に、できる限り取り組んでまいりました。引き続き、一人一人がその思いを心に深く刻み、さらなる技術の伝承と後継者の育成に努めてまいります。今後も当保存会の活動にご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

■ ふ る さ と 探 訪 ■

岩崎 剛さんの古里

「神の島に臨む長浜」

(滋賀県長浜市)

琵琶湖の最北部に竹生島^{ちくぶしま}という周囲約2kmの小島が浮かんでいる。島全体が樹木に覆われ、遠目にはとんがり山の山頂だけが湖面からちょこんと顔を出しているように見える。周囲を切り立った岸壁で囲まれたこの小島は、古来より神の島として崇められてきた。唯一上陸可能な島の南側に宝巖寺^{ほうがんじ}と竹生島神社が建立され、寺の唐門と神社の本殿は国宝に指定されている。

寺と神社、と書いたがそれは明治の神仏分離によるもので、両社寺は平安時代以来神仏習合の信仰が行われてきた。唐門のある観音堂と神社本殿が舟廊下と呼ばれる屋根付きの回廊で連結されていることから、両社寺は本来不可分のものであったことが分かる。この舟廊下も重文指定されていて、ひと続きになった唐門、観音堂、舟廊下、本殿の屋根はすべて檜皮葺であり、この度葺き替えられて往時の美しさを取り戻した。

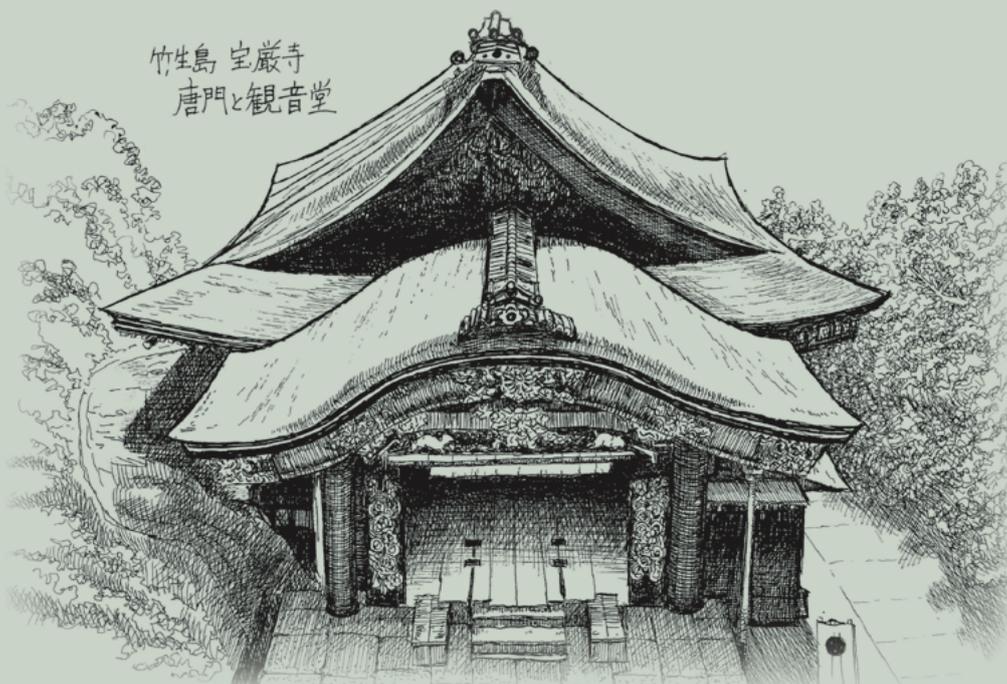
竹生島は行政上、岩崎 剛さんの故郷である滋賀県長浜市に組み入れられている。琵琶湖畔の町である長浜市

と竹生島の間には琵琶湖汽船が就航していて、30分ほどで島に渡ることができる。

長浜は羽柴秀吉が初めて城持ち大名となって開いた城下町として知られる。秀吉は町の表看板ではあるのだが、町民がひそかに信奉している戦国武将は石田三成であるようだ。長浜の武家に生まれた石田三成は小姓として秀吉に仕え、秀吉の死後は西軍を率いて東軍の総大将家康と関ヶ原で対決する。天下分け目の戦いに敗れ、罪人として六条河原で斬首されたことは歴史書の示す通りだ。

しかし歴史は常に勝者によって作られるもの。敗軍の将である三成が敵役として伝えられることは浮世の定めには他ならない。長浜市民にとって彼は今も昔も悲運の英雄であり、時が味方すれば天下人ともなっていた武将である。

長浜駅前には彼の逸話「三献の茶」を描いた銅像も建てられている。あだやおろそかに語るべき人物ではあるまい。



(文・イラスト 米林 真)

古文化

第 127 号



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会